

聴覚障害

「手話」「筆談」「口話」などを組み合わせて

聴覚障害とは、身の周りの音や話し声が聞こえにくく、またほとんど聞こえない状態のこと。外見上わかりにくいいため、その人が抱えている困難にも気づかれにくい側面があります。聴覚障害者は補聴器や人工内耳を装着する場合も多く、コミュニケーション方法は「手話」「筆談」「口話」などさまざまで、話す相手や場面によって複数の手段を組み合わせ使い分けられることもあります。また、国語力は人それぞれ（聴覚の活用による言語の習得に課題があるため）、筆談の場合はその人に合わせる必要があります。

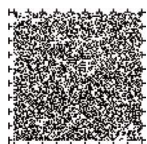
コミュニケーション方法を確認しましょう

「筆談」「文字変換ツール」のほか、手話通訳者同伴など方法は人それぞれ。お互いに確実に伝わる方法を確認しましょう。患者は、情報が正しく伝わる工夫があると安心できます。手話通訳を同伴している場合は、通訳の同伴を受け入れるようにしましょう。



院内での呼び出しは「手を振る」などでお知らせを

院内のアナウンスは聞こえません。診察や窓口への呼び出しは、「手を振る」「目線を合わせる」といった方法で知らせてください。



- ☐ 患者は、受診前に、伝えたいこと（症状、困りごと、障害についてなど）をメモしておきましょう。受診時に見せるとスムーズです。「医療受診時障害特性記入シート」(P.17～18)も活用しましょう。
- ☐ 手話通訳は安心して受診するために必要なもの。同行を認めてもらえると助かります。
- ☐ レントゲン検査などの場合、「息を止めて」などの指示が聞こえません。できればボードに文字を書いて示すなどの工夫を。

こんなことも…

「見せる」など、伝える工夫を

たとえば検温するときには、患者に体温計を見せて、測るしぐさをするので「体温を測る」のだと理解できます。検査結果などは数字を指さしたり筆談で伝えるなどして工夫を。



医療用語の通訳は難しい 図や文字で患者に説明を

難しい医療用語などは、手話通訳の方でも通訳が大変な時があります。たとえば図や写真などを示したり、文字で書いたりすることで、患者に正しく伝えることができます。

通訳者ではなく患者を見て話しましょう

手話通訳が同行していると、つい通訳に向かって話してしまいがち。できれば聴覚障害者の顔を見て話し、理解しているかどうか患者の反応などから確認しましょう。

